

〔岐阜県中津川市加子母地区内木家所蔵史料調査成果報告〕

## 内木家所蔵史料調査の経緯と所蔵史料について

萱場 真仁

### はじめに

徳川林政史研究所は、近年全国各地の行政機関や史料保存機関、さらには山間地域の旧家などに所蔵されている森林管理・活用の歴史に関わる史料を収集・保存し、一元的な研究利用に供することを目的とした林政史アーカイブズ調査を継続して実施している。

この調査の一環として、平成三〇年（二〇一八）度からは、岐阜県中津川市加子母地区に所在する内木哲朗家所蔵史料調査に着手した。同家には、約三万点におよぶ史料が所蔵されており、本調査では、これら史料の整理ならびに適切な保存措置を進めるとともに、尾張藩の森林管理、ならびに近世山村における生活実態について研究をおこなっている。

これまでの調査で明らかとなった研究成果は、論文やブックレットの形で発表したり、歴史講演会やシンポジウムなどを開催したりすることによって、歴史研究者や地域住民に対して還元してきた。本特集では、その

成果発表の一つとして、これまで調査に参加してきた研究員・研究生、そして研究協力が取り組んできた研究成果を発表することとしたい。

### 一 御山守内木家と濃州三ヶ村

最初に、史料所蔵先の内木家について説明を加えておく。内木家はもともと、美濃国恵那郡加子母村の草分けとして庄屋を務め、享保一五年（一七三〇）からは「三浦・三ヶ村御山守」という役職を尾張藩から言い渡され、幕末まで同役を代々務めてきた家である。

「三浦・三ヶ村御山守」（以下、御山守と略記）とは、飛驒・美濃・信濃の三国の国境に位置する信濃国筑摩郡王滝村の三浦山と、木曾山の南西側に位置する美濃国恵那郡の三ヶ村（川上村・付知村・加子母村）の御山の管理を担っていた役職のことを指す。なお、一般的に恵那郡の三ヶ村は、信州側の「本木曾」に対して「裏木曾三ヶ村」と呼称されることもあるが、史料上の表記では概ね「濃州三ヶ村」で登場するため、本稿でもこの表記で統一

することとする。

内木家の当主はこの御山守に就任すると、彦七もしくは彦七郎を通称し、嫡子は御山守見習として善右衛門もしくは善左衛門を名乗るのが通例だった。前述の通り、内木家が御山守に就任するのは享保一五年からであり、このときの当主は一〇代の武益であった。以後、内木家は明治五年（一八七二）に同役が廃止されるまで、六代にわたって御山守を務めている。

御山守の業務には、飛驒・美濃・信濃の三国の境界が位置する三浦山や三ヶ村の御山の見廻り、これら山々で発生した盗伐の摘発と吟味、村方からの森林利用に関わる諸願の取り次ぎなどがあつた。そのため、同家に所蔵されている史料は、御山守の業務や村々の森林管理に関わる内容が多く、尾張藩林政の実態を解明するうえで重要であるといえる。

## 二 調査の方法と主要史料について

前述の通り、内木家に所蔵されている史料の総数は、約三万点におよぶ。これらのなかには、既に地元の研究者によって途中まで仮目録が作成されたものが含まれており、これについては、デジタルカメラで史料を撮影し、撮影したデジタルデータをもとに目録を再整備する作業を実施している。そして、目録の再整備が済んだ史料から、現地にて中性紙封筒などへの装備替えをおこなっている。一方、仮目録が作成されていない史料については、現地で現状記録を作成し、記録の作成が済んだものから順に、目録化作業と装備替えの作業を進めている。

現地での作業は、これまで年三回の合宿形式で実施した。その結果、令和二年（二〇二〇）一二月までの目録採録・整備史料点数は約四四一〇点、

撮影史料点数は約四五一〇点、装備替えが完了した史料点数は約三五九〇点となった。今後も、現地ならびに研究所内での内木家文書の整理作業は、継続して実施する予定である。

なお、これら史料のなかには、調査・研究を進めるうえで特に重要な史料が二点存在する。以下、それらについて簡単に説明しておきたい。

一点目は、「御山方御用并諸事日記」である。「御山方御用并諸事日記」（以下、「日記」と略記）は、内木家第一一代当主内木彦七武久によって記された日記で、現在、宝暦一三年（一七六三）・明和二年（一七六五）・同五年・同六年・同八年・同九年（十一月に安永に改元）・安永二年（一七七三）・同三年・同四年の計九冊が現存している。これら「日記」は、内木家と徳川林政史研究所に所蔵されており、宝暦一三年・明和二年・同九年の三冊以外は内木家の所蔵である。

「日記」はすべて横帳仕立てとなっており、一冊の丁数は一七〇丁前後で、なかには二〇〇丁を越えるものもある。内容については、御山守の公務と日々の生活の様子が一日ごとに詳細に記されており、近世中期の加子母村の生活の様相を知るうえで貴重な史料である。

もう一つは、内木家「御用状留」である。本史料は、木曾材木役所をはじめとする尾張藩の役所からの通達や、村の百姓たちからの願い出を取り次ぐにあたって作成した書状類などを年ごとに書き留めた帳面である。これらは、内木家と徳川林政史研究所にそれぞれ所蔵されており、すべてそろえると、元文五年（一七四〇）～慶応二年（一八六六）までのものが全九五冊現存している。特に、宝暦七年（一七五七）～文化一五年（一八一八）までは、ほぼ年代の抜けがない状態でそろっており、当該期における御山守内木家の勤務実態や村の様子を知るうえで非常に有用な史料であるといえる。

これら「日記」「御用状留」の記事を併せてみていくと、近世中期における加子母村の生活や、尾張藩林政に御山守がどのように関わっていたのかを知ることができる。

### 三 本特集掲載論文の紹介

本特集に掲載した論考は、いずれも前述の「日記」や「御用状留」をもとに、森林をめぐる御山守と村の人びとの関係や、加子母村における人生儀礼について考察したものである。

萱場真仁「近世中期における杣頭の活動実態——濃州三ヶ村を中心に——」は、御用材伐り出しの請け負いを担う杣頭の活動実態について考察を加えた。杣頭たちは、御用材の伐採を請け負う以外にも、村内の森林を積極的に利用しようとする姿が近世中期にはみられる。そうした杣頭たちと御山守との関係について、濃州三ヶ村を事例に詳述している。

浅井良亮「近世加子母における災害と御山守——洪水と橋木に注目して——」は、加子母村で発生した洪水に着目し、それに対応する御山守や村方について検討した。近世の加子母は降水・降雨が多く、それゆえ度々洪水に見舞われた。洪水の際には橋から人が滑落したり、御用筋の往来が途絶してしまったりする危険があった。本論文では、それらをめぐる村の人びとと御山守、さらには藩の対応と動きについて、具体的な事例をもとに考察を加えている。

高木まどか「近世山村における離縁——美濃国恵那郡加子母村内木家『御山方御用并諸事日記』から——」は、「日記」をもとに内木彦七の次女おまつとの婚儀と離縁について詳述した。このうち、特に離縁をめぐる動きにつ

内木家所蔵史料調査の経緯と所蔵史料について

いては、当人や家長以上に、仲人や親類をはじめとする近隣の者たちが動いている姿を指摘し、当該地域の人びとの様相を精緻に描き出している。

萱田寛也「加子母村における家族の看取りと死生観——内木彦七家を事例に——」は、内木彦七の「母人」や親類の子どもたちを事例に、彦七が身内の死をどのように捉え、行動したのかについて検討した。「日記」には、「母人」たちの病や死に直面した彦七自身の感情、さらには当時の慣習に基づく行動などが記されている。本論文では、これら「日記」の記述をもとに、近世に生きた人びとの「死」への対応について詳細に迫っている。

これら成果を端緒として、当研究所では今後も近世の森林管理のあり方や、山村地域における人びとの交流について研究員・研究生らで協力しながら、より深く考察していきたい。

最後に末筆ながら、本調査ならびに現地での歴史講演会などにおいて、いつも格別なご配慮を賜っている史料所蔵者の内木哲朗氏とご家族の皆様さまには、この場を借りて心より御礼申し上げます。

#### 〔参考文献〕

- 太田尚宏「尾張藩『御山守』の職域形成と記録類」〔国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇〕第一四号、二〇一八年
- 同「木曾五木」と濃州三ヶ村〔徳川林政史研究所編『江戸時代の森林と地域社会』公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所、二〇一八年〕
- 同「宝暦期における尾張藩の御材木仕出と『三浦・三ヶ村御山守』——濃州三ヶ村の森林コントロールとの関連から——」〔徳川林政史研究所「研究紀要」第五二号〕〔金鯉叢書〕第四五輯所収、二〇一八年
- 同『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化』二 山村の人・家・つきあい——江戸時代の、かしも生活、①—〔公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所、二〇二〇年〕

加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』(加子母村、一九七二年)  
芳賀和樹「尾張藩の造林政策と『三浦・三ヶ村御山守』」(徳川林政史研究所『研究紀要』第五三号)〔金鯨叢書〕第四六輯所収、二〇一九年)

同『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化―御山守の仕事と森林コントロール』(公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所、二〇二〇年)